

# 原典で読む 外国人が見た日本



## 高橋知明

(瀬田玉川神社禰宜・公益財団法人  
鎮守の森のプロジェクト事務局次長)

### 第二回 カッテンディーケ『長崎海軍伝習所の日々』(前編)

オランダ海軍の軍人で、後にオランダの海軍大臣や外務大臣となるリッター・ホイセン・ファン・カッテンディーケ(一八二六年―一八六六年)は、幕末の安政三年(一八五七年)、幕府が発注した軍艦ヤパン号(後の咸臨丸)をオランダから長崎に回航し、その後日本から引揚げるまでの二年余、幕府が開いた長崎海軍伝習所の教官として活躍しました。

この伝習所では、当時西洋科学に触れる機会の少なかった日本の青年を、航海術はもちろん、砲術・測量術・数学・科学などの講義や実地訓練を通じて熱心に指導し、勝海舟、榎本武揚、五代友厚など幾多の人材を輩出しています。まさに

この伝習所創設こそが日本海軍の夜明けとなり、卒業した生徒らはあらゆる方面において指導的地位を占め、遂に日本は世界の人々をして目を見張らせる程の進歩を遂げ、我が国文化の偉大なる先達者となっていくのです。

第二回は、このカッテンディーケの『長崎海軍伝習所の日々』(平凡社東洋文庫、一九六四年初版)より紹介します。

カッテンディーケの来日は、幕府が鎖国政策を持続することが困難になったと判断し、欧米諸勢力に対抗できる近代的海軍の創設を決定したことに始まりま

す。幕府は当時の長崎オランダ商館長ドネル・クルチウスを通じて、オランダ政府に対して協力並びに軍艦の建造と購入の斡旋について内密に依頼しました。これを契機に、最終的には長崎に海軍伝習所が設けられ、オランダから海軍教育班が招聘されます。

ちなみに、この頃のオランダは、東アジアにおける影響力が英米露などの勢いに押されて衰微の一途をたどっていました。そんな中、長年の友である幕府に恩を売ること、日本における地位を保全しようとする意図もあったようです。

ともあれ、第二次海軍教育班長として派遣されたカッテンディーケは、ヤパン号に乗ってオランダから四千海里の航海を経て長崎に到着し、まずはその自然と街並みの美しさに驚きます。

「誰でも海旅の後には、ちよつとした事にも感嘆し易いものであるが、そうした気持ち以外に、実際長崎入港の際、眼前に展開する景色ほど美しいものは、まさにこの世界にあるまいと断言しても、あながち過褒ではあるまい」

当時の美しい日本の様子、現代の私たちも見てみたいものですね。

それでは日本人の生活文化はどう見たのでしょうか。

「民衆はこの制度の下に大いに榮え、すこぶる幸福に暮らしているようである。日本人の欲望は単純で、贅沢といえただだ着物に金をかけるくらいが関の山である。……だから誰も皆、その身分に応じた財産を持つことができるのである。上流家庭の食事とても、至って簡素であるから、貧乏人だとして富貴の人々ともさほど違った食事をしている訳ではない」

「日本の社会では、商人はすこぶる身分の低いものとされている。……さればとて、彼等が軽蔑されていると見るのは誤りである。現に幕府自身が商人であるのに、どうして商人が軽蔑されるだろうか。オランダ人が二百年以上に及ぶ長い間、取引きを営んできた相手は、そもそも誰か、それは外ならぬ幕府自身ではないか」

江戸時代の身分制度とえば「士農工商」。歴史教科書には民衆は支配階級に搾取・弾圧されていたかのように描かれています。実際はそうではなかったようです。

教育については、どうでしょうか。カッテンディーケは「一般に読み書きの教育は普及し」と日本人が子供たちに基礎を叩き込んでいることを示す一方、子供を自由に伸び伸びと育てている様子を記録しています。



カッテンディーケ

「一般に親たちはその幼児を非常に愛撫し、その愛情は身分の高下を問わず、どの家庭生活にもみなぎっている。……よく面倒を見るが、自由に遊ばせ、さほど寒くなければ殆ど素っ裸で路上を駆けずり回らせる。……子供らは、かような工合で直ぐ発育し、体は丈夫かつ敏捷になる。……子供らがどんなにヤンチャでも、親たちがその子供を窘めているところなど殆ど見ることがない。ましてや叱ったり懲らしなどしている有様はおよそ見たことがない。日本の子供は恐らく世界中で一番厄介な子供であり、少年は最大の腕白小僧であるが、また彼等ほど愉快な楽しそうな子供たちは他所では見られない」

これを読んだら、うちの子供たちもきっと江戸時代で過ごしたいというに違いないでしょう。

さらに、日本人の死生観にも触れて、こう述べています。

「日本人の死を恐れないことは格別である。むしろ日本人とて、その近親の死に対して悲しまないというようなことはないが、現世から彼の世に移ることは、ごく平気に考えているようだ。彼等はその肉親の死について、まるで茶飯事のように話し、地震火事その他の天災をば茶化してしまう。だから私は仮りに外国人が、日本の大都会に砲撃を加え、もつてこの国民をしてヨーロッパ人の思想に馴致せしめるような強硬手段をとっても、とうてい甲斐はなからうと信ずる。そんなことよりも、ただ時を俟つのが最善の方法であろう」

彼は魂が永久のもので肉体は現世での仮の箱のようなものであるという神道思想をよく理解しています。そして有事には死を恐れない、平時は教育や文化水準が高く、大きな格差もなく、国民の幸福度が高い——このような国民を外国が力づくで支配しようとしても、それは一筋縄では行かない厄介なことであるし、賢明ではないと見たのです。

このように、カッテンディーケは日本固有の特質をよく理解していました。後編では、彼の海軍教官としての視点から、伝習所での様子を紹介していきます。